

夏目漱石

文鳥

文

鳥

十月早稲田わせだに移る。伽藍がらんの様な書齋みえきちに只一人、片附けた顔を頬杖ほおづえで支えていると、三重吉が来て、鳥を御飼いなさいと云う。飼ってもいいと答えた。然しかし念の為だから、何を飼うのかねと聞いたら、文鳥ですと云う返事であつた。

文鳥は三重吉の小説に出て来る位だから奇麗きれいな鳥に違ちがなからうと思つて、じゃ買つてくれたまえと頼んだ。ところが三重吉は是非御飼いなさいと、同じ様な事を繰

り返している。うむ買うよ買うよとやはり頬杖を突いたままで、むにやむにや云ってるうちに三重吉は黙ってしまった。大方頬杖に愛想を尽かしたんだろうと、この時始めて気が附いた。

すると三分ばかりして、今度は籠を御買いなさいと云いだした。これも宜よろしいと答えると、是非御買いなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釈を始めた。その講釈は大分込み入ったものであったが、気の毒な事に、みんな忘れてしまった。只好いのは二十円位すると云う段になって、急にそんな高価たかいのでも善かろうと云って置い

た。三重吉はにやにやしている。

それから全体何所で買うのかと聞いてみると、なに何所の鳥屋にでもありますと、実に平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なに何所にかあるでしょう、とまるで雲を攫む様な寛大な事を云う。でも君あてがなくっちゃ不可なかというと、あたかも不可ない様な顔をしてみせたら、三重吉は頬ぺたへ手を宛てて、何でも駒込に籠の名人があるそうですが年寄だそうですから、もう死んだかも知れませんか、非常に心細くなってしまうた。

何しろ言いだしたものに責任を負わせるのは当然の事だから、早速万事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云う。金は慥たしかに出した。三重吉はどこで買ったか、七子ななこの三つ折おれの紙入を懐中して、人の金でも自分の金でも悉皆しっかいこの紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五円札を慥たしかにこの紙入の底へ押し込んだのを目撃した。

斯様かようにして金は慥たしかに三重吉の手に落ちた。然し鳥と籠とは容易にやって来ない。

そのうち秋が小春こはるになった。三重吉は度々たびたび来る。よく

女の話などをして帰って行く。文鳥と籠の講釈は全く出ない。硝子戸ガラスを透すかして五尺の縁側には日が好く当る。どうせ文鳥を飼うなら、こんな暖かい季節に、この縁側へ鳥籠を据えてやったら、文鳥も定めし鳴き善かろうと思ふ位であつた。

三重吉の小説によると、文鳥は千代ちよちよ々々と鳴くそうである。その鳴き声が大分だいぶん気に入つたと見えて、三重吉は千代々々を何度となく使っている。或あるいは千代と云う女に惚ほれていた事があるのかも知れない。然し当人は一向そんな事を云わない。自分も聞いてみない。只縁側に日

が善く当る。そうして文鳥が鳴かない。

そのうち霜が降り出した。自分は毎日伽藍の様な書齋に、寒い顔を片付けてみたり、取乱してみたり、頬杖を突いたり已めたりして暮していた。戸は二重に締め切った。火鉢に炭ばかり継いでいる。文鳥は遂に忘れた。

ところへ三重吉が門口から威勢よく這入って来た。時は宵の口であつた。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳して、浮かぬ顔をわざとほてらしていたのが、急に陽気になつた。三重吉は豊隆を従えている。豊隆はいい迷惑である。二人が籠を一つずつ持っている。その上に三重

吉が大きな箱を兄あにき分ぶんに抱えている。五円札が文鳥と籠と箱になつたのはこの初冬はつふゆの晩であつた。

三重吉は大得意だいである。まあ御覧なさいと云う。豊隆その洋燈ランプをもつと此方こちへ出せなどと云う。その癖寒いので鼻の頭が少し紫色になつている。

成程立派な籠が出来た。台が漆で塗つてある。竹は細く削つた上に、色が染つけてある。それで三円だと云う。安いなあ豊隆と云つている。豊隆はうん安いと云つている。自分は安いか高いか判然と判らないが、まあ安いなあと云つている。好いいになると二十円もするそうです

と云う。二十円はこれで二返目である。二十円に比べて安いのは無論である。

この漆はね、先生、日向ひなたへ出して曝さらして置くうちに黒味が取れて段々朱の色が出て来ますから、——そうしてこの竹は一返善く煮たんだから大丈夫ですよなどと、しきりに説明をしてくれる。何が大丈夫なのかねと聞き返すと、まあ鳥を御覧なさい、奇麗でしようと言っている。

成程奇麗だ。次の間へ籠を据えて四尺ばかり此方こっちから見ると少しも動かない。薄暗い中に真白に見える。籠の中にうずくまっていなければ鳥とは思えない程白い。何

だか寒そうだ。

寒いだろうねと聞いてみると、その為に箱を作ったんだと云う。夜になればこの箱に入れてやるんだと云う。籠が二つあるのはどうするんだと聞くと、この粗末な方へ入れて時々行水を使わせるのだと云う。これは少し手数^あが掛るなど思っていると、それから糞^{ふん}をして籠を汚しますから、時々掃除をして御遣^{おや}りなさいとつけ加えた。三重吉は文鳥の為には中々強硬である。

それをはいはい引受けると、今度は三重吉が袂^{たもと}から粟^{あわ}を一袋出した。これを毎朝食わせなくっちゃ不可^{いけ}ません。

もし餌えをかえてやらなければ、餌壺えつぼを出して殻だけ吹て御遣おやんなさい。そうしないと文鳥が実のある粟を一々拾い出さなくつちやなりませんから。水も毎朝かえて御遣おやんなさい。先生は寝坊だから丁度好いでしようと大変文鳥に親切を極めている。そこで自分もよろしいと万事受合あひあった。ところへ豊隆が袂から餌壺と水入を出して行儀よく自分の前に並べた。こう一切万事を調べて置いて、実行を逼せまられると、義理にも文鳥の世話をしなければならなくなる。内心では余程覚束おぼつかなかったが、まずやってみようとまでは決心した。もし出来なければ家うちのものが、

どうかするだろうと思った。

やがて三重吉は鳥籠を叮嚀ていねいに箱の中へ入れて、縁側へ持ち出して、此所ここへ置きますからと云って帰った。自分は伽藍の様な書斎の真中まんなかに床を展のべて冷かに寝た。夢に文鳥を背負しよい込んだ心持は、少し寒かったが眠ねぶってみれば不断の夜の如く穏かである。

翌朝よくあさ眼が覚めると硝子戸ガラスに日が射している。忽たちまち文鳥に餌をやらなければならぬと思つた。けれども起きるのが退儀であつた。今に遣やらう、今に遣らうと考へているうちに、とうとう八時過になつた。仕方がないか

ら顔を洗う序ついでを以て、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋ふたを取って鳥籠を明海あかるみへ出した。文鳥は眼をぱちつかせている。もっと早く起きたかっただろうと思っただら気の毒になった。

文鳥の眼は真黒である。瞼まぶたの周圍まわりに細い淡紅色と きいろの絹糸を縫い附けた様な筋が入っている。眼をぱちつかせる度に絹糸が急に寄って一本になる。と思うと又丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首を一寸傾かたぶけながらこの黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。そうしてちちと鳴いた。

自分は静かに鳥籠を箱の上に据えた。文鳥はぱっと留り木を離れた。そうして又留り木に乗った。留り木は二本ある。黒味がかつた青軸を程よき距離に橋と渡して横に並べた。その一本を軽く踏まえた足を見ると如何にも華奢きやしやに出来ている。細長い薄紅うすくれないの端に真珠を削った様な爪うまが着いて、手頃な留り木を甘く抱え込んでいる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向むきを換えていた。しきりに首を左右に傾かたぶける。傾けかけた首を不図ふと持ち直して、心持前へ伸のじたかと思つたら、白い羽根が又ちらりと動いた。文鳥の足は向うの留

り木の真中あたりに具合よく落ちた。ちちと鳴く。そうして遠くから自分の顔を覗のぞき込んだ。

自分は顔を洗いに風呂場へ行った。帰りに台所へ廻つて、戸棚を明けて、昨夕ゆうべ三重吉の買って来てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、又書齋の縁側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕ゆうべ叮嚀に餌を遣る時の心得を説明して行った。その説によると、無暗むやみに籠の戸を明けると文鳥が逃げ出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手をその下へ宛てがって、外から

出口を塞ぐふさ様にしなくっては危険だ。餌壺を出す時も同じ心得で遣らなければならぬ。とその手つきまでしてみせたが、こう両方の手を使って、餌壺をどうして籠の中へ入れる事が出来るのか、つい聞いて置かなかつた。

自分は已やむを得ず餌壺を持ったまま手の甲で籠の戸をそろりと上へ押し上げた。同時に左の手で開あいた口をすぐ塞いだ。鳥は一寸振り返った。そうして、ちちと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の処置に窮した。人の隙すきを窺うかがって逃げる様な鳥とも見えないので、何となく気の毒になった。三重吉は悪い事を教えた。

大きな手をそろそろ籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏はばたきを始めた。細く削った竹の目から暖いむく毛が、白く飛ぶ程に翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭いやになった。粟の壺と水の壺を留り木の間に漸ようやく置くや否や、手を引き込みました。籠の戸ははたりと自然ひとりでに落ちた。文鳥は留り木の上に戻った。白い首を半ば横に向けて、籠の外にいる自分を見上げた。それから曲げた首を真直まっすぐにして足の下もとにある粟と水を眺めた。自分は食事をしたに茶の間へ行つた。

その頃は日課として小説を書いている時分であつた。

飯めしと飯の間は大抵机に向つて筆を握っていた。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事が出来た。伽藍の様な書齋へは誰も這入つて来ない習慣であつた。筆の音に淋しさと云う意味を感じた朝も昼も晩もあつた。然し時々はこの筆の音がぴたりと已む、又已めねばならぬ、折も大分あつた。その時は指の股またに筆を挟はさんだまま手の平へ顎あごを載せて硝子越ガラスごしに吹き荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが済むと載せた顎を一応撮つまんでみる。それでも筆と紙が一所にならない時は、撮んだ顎を二本の指で伸のしてみる。すると縁側で文鳥が忽ち千代々々と二声ふたこえ

鳴いた。

筆を擱おいて、そつと出てみると、文鳥は自分の方を向いたまま、留り木の上から、のめりそうに白い胸を突き出して、高く千代と云った。三重吉が聞いたらさぞ喜ぶだろうと思う程な美いい声で千代と云った。三重吉は今に馴れると千代と鳴きますよ、きつと鳴きますよ、と受合つて帰って行つた。

自分は又籠その傍そばへしやがんだ。文鳥は膨はらんだ首を二三度豎たて横よこに向け直した。やがて一団ひとかたまりの白しろい体からだがぽいと留り木の上を抜け出した。と思うと奇麗な足の爪が半

分程餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つ繰り返りそんな餌壺は釣鐘つりがねの様に静かである。さすがに文鳥は軽いものだ。何だか淡雪あわゆきの精の様な気がした。

文鳥はつと嘴くちばしを餌壺の真中に落した。そうして二三次左右に振った。奇麗に平ならして入れてあつた粟がはらはらと籠の底に零こぼれた。文鳥は嘴を上げた。咽喉のどの所で微かすかな音がする。又嘴を粟の真中に落す。又微な音がする。

その音が面白い。静かに聴いていると、丸くて細やかで、しかも非常に速すみやかである。堇程すみれな小さい人が、黄金こがねの槌つちで瑪瑙めのうの基石でもつづけ様たたに敲たたいている様な気がする。

嘴の色を見ると紫を薄く混ぜた紅べにの様である。その紅
 が次第に流れて、粟をつつく口尖くちさきの辺あたりは白い。象牙ぞうげを
 半透明にした白さである。この嘴が粟の中へ這はい入る時は
 非常に早い。左右に振り蒔まく粟の珠も非常に軽そうだ。
 文鳥は身を逆さまにしないばかりに尖とがった嘴を黄色い粒
 の中に刺し込んで、膨くらんだ首を惜気みぎひだりもなく右左
 へ振る。籠の底に飛び散る粟の数は幾粒だか分らない。
 それでも餌壺だけは寂然せきぜんとして静かである。重いもので
 ある。餌壺の直径は一寸五分程だと思ふ。

自分はそつと書斎へ帰って淋しくペンを紙の上に走ら

していた。縁側では文鳥がちちと鳴く。折々は千代々々とも鳴く。外では木枯こがらしが吹いていた。

夕方には文鳥が水を飲む所を見た。細い足を壺の縁へ懸けて、小さい嘴ちきに受けた一雫ひとしずくを大事そうに、仰向あおもむいて

呑み下している。この分では一杯の水が十日位続くだろうと思つて又書齋へ歸つた。晩には箱へしまつて遣つた。寝る時硝子戸から外を覗いたら、月が出て、霜が降つていた。文鳥は箱の中でことりともしなかつた。

明あくる日ひもまた気の毒な事に遅く起きて、箱から籠を出してやったのは、やっぱり八時過ぎであつた。箱の中で

はどうから目が覚めていたんだらう。それでも文鳥は一向不平らしい顔もしなかった。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたたいて、心持首をすくめて、自分の顔を見た。

昔し美しい女を知っていた。この女が机に凭もたれて何か考えている所を、後うしろから、そつと行つて、紫の帯上げの房になつた先を、長く垂らして、頸筋くびすじの細いあたりを、上から撫なで廻したら、女はものう気に後うしろを向いた。その時女の眉は心持八の字に寄っていた。それで眼尻と口元には笑わらいが萌きざしていた。同時に恰好の好よい頸を肩まで

すくめていた。文鳥が自分を見た時、自分は不図この女の事を思い出した。この女は今嫁に行つた。自分が紫の带上でいたずらをしたのは縁談の極つた二三日後である。

餌壺にはまだ粟が八分通り這入っている。然し殻も大分混つていた。水入には粟の殻が一面に浮いて、苛く濁つていた。易^かえて遣らなければならない。又大きな手を籠の中へ入れた。非常に要心して入れたにも拘^{かかわ}らず、文鳥は白い翼を乱して騒いだ。小さい羽根が一本抜けても、自分は文鳥に済まないと思つた。殻は奇麗に吹いた。吹

かれた殻は木枯が何処どこかへ持って行つた。水も易えてやつた。水道の水だから大變冷たい。

その日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。その間あいだには折々千代々々と云う声も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考えた。然し縁側へ出てみると、二本の留り木の間を、彼方あちらへ飛んだり、此方こちらへ飛んだり、絶間なく行きつ戻りつしている。少しも不平らしい様子はなかつた。

夜は箱へ入れた。明る朝眼が覚めると、外は白い霜だ。文鳥も眼が覚めているだろうが、中々起きる気にならな

い。枕元にある新聞を手取るさえ難儀だ。それでも煙草たばこは一本ふかした。この一本をふかしてしまつたら、起きて籠かごから出して遣ろうと思ひながら、口から出る煙けぶりの行方ゆくえを見詰めていた。するとこの煙の中に、首をすくめた、眼を細くした、しかも心持眉を寄せた昔の女の顔が一寸見えた。自分は床の上に起き直つた。寝巻の上へ羽織を引掛けて、すぐ縁側へ出た。そうして箱の蓋をはずして、文鳥を出した。文鳥は箱から出ながら、千代々々と二声鳴いた。

三重吉の説によると、馴れるに従つて、文鳥が人の顔

を見て鳴く様になるんだそうだ。現に三重吉の飼っていた文鳥は、三重吉が傍そばにいさえすれば、しきりに千代々々と鳴きつづけたそうだ。のみならず三重吉の指の先から餌えを食ると云う。自分もいつか指の先で餌をやってみたかと思った。

次の朝は又怠なまけた。昔の女の顔もつい思い出さなかった。顔を洗って、食事を済まして、始めて、気が附いた様に縁側へ出て見ると、いつの間にか籠が箱の上に乗っている。文鳥はもう留り木の上を面白そうにあちら、こちらと飛び移っている。そうして時々は首を伸のして籠の

外を下の方から覗いている。その様子が中々無邪気である。昔紫の帶上でいたずらをした女は襟えりの長い、脊せいのすらりとした、一寸首を曲げて人を見る癖があつた。

粟はまだある。水もまだある。文鳥は満足している。自分は粟も水も易えずに書齋へ引込んだ。

昼過ぎ又縁側へ出た。食後の運動かたがた、五六間の廻り縁を、あるきながら書見する積つもりであつた。ところが出てみると粟がもう七分がた尽きている。水も全く濁ってしまった。書物を縁側へ抛ほうり出して置いて、急いで餌と水を易えて遣つた。

次の日もまた遅く起きた。しかも顔を洗って飯を食うまでは縁側を覗かなかつた。書齋に帰ってから、或は昨日きのうの様に、家人が籠うちのものを出して置きはせぬかと、一寸縁へ顔だけ出して見たら、果して出してあつた。その上餌も水も新しくなっていた。自分はやっと安心して首を書齋に入れた。途端に文鳥は千代千代と鳴いた。それで引込めた首を又出してみた。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。けげんな顔をして硝子越に庭の霜を眺めていた。自分はどうとう机の前に帰った。

書齋の中では相変わらずペンの音がさらさらする。書き

かけた小説は大分はかどった。指の先が冷たい。今朝埋
けた佐倉炭は白くなって、薩摩五徳に懸けた鉄瓶が殆ど
冷めている。炭取は空だ。手を敲いたが一寸台所まで聴
えない。立って戸を明けると、文鳥は例に似ず留り木の
上にじつと留っている。よく見ると足が一本しかない。
自分は炭取を縁に置いて、上からごごんで籠の中を覗き
込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥はこの華奢
な一本の細い足に総身を託して黙然として、籠の中に片
附いている。

自分は不思議に思った。文鳥に就て万事を説明した三

重吉もこの事だけは抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて帰った時、文鳥の足はまだ一本であつた。しばらく寒い縁側に立って眺めていたが、文鳥は動く気色けしきもない。音を立てないで見詰めていると、文鳥は丸い眼を次第に細くし出した。大方眠たいのだらうと思つて、そつと書齋へ這入ろうとして、一步足を動かすや否や、文鳥は又眼を開いたあ。同時に真白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を閉たてて火鉢へ炭をついだ。

小説は次第に忙しくなる。朝は依然として寝坊をする。一度家うちのものが文鳥の世話をしてくれてから、何だか自

分の責任が軽くなつた様な心持がする。家のものが忘れる時は、自分が餌をやる水をやる。籠の出し入れをする。しない時は、家のものを呼んでさせる事もある。自分は只文鳥の声を聞くだけが役目の様になつた。

それでも縁側へ出る時は、必ず籠の前へ立留つて文鳥の様子を見た。大抵は狭い籠を苦にもしないで、二本の留り木を満足そうに往復おうふくしていた。天氣の好い時は薄い日を硝子越に浴びて、しきりに鳴き立てていた。然し三重吉の云つた様に、自分の顔を見てことさらに鳴く気色は更になかつた。

自分の指からじかに餌を食うなどと云う事は無論なかつた。折々機嫌のいい時は麵麩パンの粉こなどを人指指ひとさしゆびの先へつけて竹の間から一寸出してみる事があるが文鳥は決して近づかない。少し無遠慮に突き込んでみると、文鳥は指の太いのに驚いて白い翼を乱して籠の中を騒ぎ廻るのみであつた。二三度試みた後のち、自分は氣の毒になつて、この芸だけは永久に断念してしまつた。今の世にこんな事の出来るものがあるかどうかどうだか甚だ疑わしい。恐らく古代の聖徒せいんとの仕事だろう。三重吉は嘘を吐いたに違ない。或日の事、書齋で例の如くペンの音を立てて佗わびしい

事を書き連ねていると、不^ふ凶^と妙な音が耳に這入った。縁側でさらさら、さらさら云う。女が長い衣^{きぬ}の裾^{すば}を捌いている様にも受取られるが、只の女のそれとしては、余りに仰山である。雛^{ひな}段^{だん}をあるく、内^{だい}裏^り雛^{びな}の袴^{はかま}の襷^{ひだ}の擦れる音とでも形容したらよかろうと思った。自分は書きかけた小説を余^よ所^そにして、ペンを持ったまま縁側へ出てみた。すると文鳥が行水を使っていた。

水は丁度易え立てであつた。文鳥は軽い足を水入の真中に胸毛まで浸して、時々は白い翼を左右にひろげながら、心持水入の中にしやがむ様に腹を^お押し附けつつ、総

身の毛を一度に振っている。そうして水入の縁ふちにひよいと飛び上る。しばらくして又飛び込む。水入の直径は一寸五分位に過ぎない。飛び込んだ時は尾も余り、頭も余り、脊せは無論余る。水に浸ひかるのは足と胸だけである。それでも文鳥は欣然きんぜんとして行水を使っている。

自分は急に易籠かえかごを取とつて来た。そうして文鳥をこの方へ移した。それから如露じよろを持って風呂場へ行つて、水道の水を汲んで、籠の上からさあさあと掛けてやった。如露の水が尽る頃には白い羽根から落ちる水が珠になって転がった。文鳥は絶えず眼をぱちぱちさせていた。

昔紫の帯上でいたずらをした女が、座敷で仕事をして
いた時、裏二階から懐中鏡ふところかがみで女の顔へ春の光線を反射
させて楽しんだ事がある。女は薄紅くなつた頬を上げて、
ほそ織い手を額の前に翳かざしながら、不思議そうに瞬まばたきをした。
この女とこの文鳥とは恐らく同じ心持だろう。
日数ひかずが立つに従つて文鳥は善く轉さえずる。然し能く忘よれ
られる。或る時は餌壺が粟の殻だけになつていた事があ
る。ある時は籠の底が糞で一杯になつていた事がある。
ある晩宴会があつて遅く帰つたら、冬の月が硝子越に差
し込んで、広い縁側がほの明るく見えるなかに、鳥籠が

しんとして、箱の上に乗っていた。その隅に文鳥の体が薄白く浮いたまま留り木の上に、有るか無きかに思われた。自分は外套がいたうの羽根を返して、すぐ鳥籠を箱のなかへ入れてやった。

翌日文鳥は例の如く元気よく囀さえずっていた。それから時々寒い夜も箱にしまつてやるのを忘れることがあった。ある晚いつもの通り書齋で専念にペンの音を聞いてみると、突然縁側の方でがたりと物の覆くつがえった音がした。然し自分は立たなかつた。依然として急ぐ小説を書いていた。わざわざ立つて行って、何でもないと忌々いまいましいか

ら、気にかからないではなかったが、やはり一寸聞耳を立てたまま知らぬ顔で済ましていた。その晩寝たのは十二時過ぎであった。便所に行った序ついで、気掛りだから、念の為一応縁側へ廻ってみると――

籠は箱の上から落ちていている。そうして横に倒れている。水入も餌壺も引繰返っている。粟は一面に縁側に散らばっている。留り木は抜け出している。文鳥はしのびやかに鳥籠の棧にかじり附いていた。自分は明日から誓ってこの縁側に猫を入れまいと決心した。

翌日あくるひ文鳥は鳴かなかった。粟を山盛入れてやった。水

を漲みなぎる程入れてやった。文鳥は一本足のまま長らく留り木の上を動かなかった。午飯ひるめしを食ってから、三重吉に手紙を書こうと思つて、二三行書き出すと、文鳥がちちと鳴いた。自分は手紙の筆を留めた。文鳥が又ちちと鳴いた。出てみたら粟も水も大分減だいぶんっている。手紙はそれぎりにして裂いて捨てた。

翌日よくじつ文鳥が又鳴かなくなった。留り木を下りて籠の底へ腹を押し付けていた。胸の所が少し膨らんで、小さい毛が漣さざなみの様に乱れて見えた。自分はこの朝、三重吉から例の件で某所まで来てくれと云う手紙を受取った。十

時までにと云う依頼であるから、文鳥をそのままにして置いて出た。三重吉に逢ってみると例の件が色々長くなつて、一所に午飯を食う。一所に晩飯を食う。その上明日あすの会合まで約束して宅うちへ歸つた。歸つたのは夜よの九時頃である。文鳥の事はすっかり忘れていた。疲れたから、すぐ床へ這入つて寝てしまった。

翌日あくるひ眼が覚めるや否や、すぐ例の件を思いだした。いくら当人が承知だつて、そんな所へ嫁に遣るのは行末よくあるまい、まだ子供だから何処へでも行けと云われる所へ行く気になるんだらう。一旦行けば無暗むやみに出られる

ものじゃない。世の中には満足しながら不幸に陥って行く者が沢山ある。などと考えて楊枝ようじを使って、朝飯を済まして又例の件を片付けに出掛けて行った。

帰ったのは午後三時頃である。玄関へ外套を懸けて廊下伝いに書齋へ這入る積りで例の縁側へ出てみると、鳥籠が箱の上に出してあった。けれども文鳥は籠の底に反っ繰り返っていた。二本の足を硬く揃えて、胴と直線に伸ばしていた。自分は籠の傍わきに立って、じっと文鳥を見守った。黒い眼を眠ねぶっている。瞼の色は薄蒼うすあおく変った。餌壺には粟の殻ばかり溜っている。啄つばむべきは一粒

もない。水入は底の光る程涸^かれている。西へ廻^かった日
硝子戸を洩れて斜めに籠に落ちかかる。台に塗った漆は、
三重吉の云った如く、いつの間にか黒味が脱けて、朱の
色が出て来た。

自分は冬の日の色づいた朱の台を眺めた。空になつた
餌壺を眺めた。空^{むな}しく橋を渡している二本の留り木を眺
めた。そうしてその下に横^{よこた}わる硬い文鳥を眺めた。

自分はこちらで両手に鳥籠を抱えた。そうして、書斎
へ持って這入った。十畳の真中へ鳥籠を卸して、その前
へかしこまっつて、籠の戸を開いて、大きな手を入れて、

文鳥を握って見た。柔かい羽根は冷切っている。

こぶし拳を籠こぶしから引き出して、握った手を開けると、文鳥は静しずかに掌てのひらの上にある。自分は手を開けたまま、しばらく死んだ鳥を見詰めていた。それから、そつと座布団の上こぶしに卸した。そうして、烈しく手を鳴らした。

十六になる小女こおんなが、はいと云って敷居際に手をつかえる。自分はいきなり布団の上にある文鳥を握って、小女の前へ抛ほうり出した。小女は俯向うつむいて畳を眺めたまま黙っている。自分は、餌を遣らないから、とうとう死んでしまったと云いながら、下女の顔を睥にらめつけた。下女はそ

れでも黙っている。

自分は机の方へ向き直った。そうして三重吉へ端書を
かいた。「家人が餌を遣らないものだから、文鳥はと
うとう死んでしまった。たのみもせぬものを籠へ入れて、
しかも餌を遣る義務さえ尽さないのは残酷の至りだ」と
云う文句であった。

自分は、これを投函^だして来い、そうしてその鳥をそつ
ちへ持って行けと下女に云った。下女は、どこへ持って
参りますかと聞き返した。どこへでも勝手に持って行け
と怒鳴りつけたら、驚いて台所の方へ持って行った。

しばらくすると裏庭で、子供が文鳥を埋るんだ埋るんだと騒いでいる。庭掃除に頼んだ植木屋が、御嬢さん、此処ここいらが好いでしようと言っている。自分は進まぬながら、書斎でペンを動かしていた。

翌日は何だか頭が重いので、十時頃になって漸ようやく起きた。顔を洗いながら裏庭を見ると、昨日植木屋の声のしたあたりに、小ちさい公札が、蒼い木賊とくさの一株と並んで立っている。高さは木賊よりもずっと低い。庭下駄を穿はいて、日影の霜を踏み砕いて、近附いて見ると、公札の表には、この土手登るべからずとあった。筆子ふでこの手蹟で

ある。

午後三重吉から返事が来た。文鳥は可愛想な事を致しましたとあるばかりで家人がうちのもの悪いとも残酷だとも一向書いてなかった。

日本文学電子図書館

文鳥・夢十夜

著 者：夏目漱石

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

日本文学電子図書館